

日本語学習者会話データベース縦断調査編の活用方法
"Database of Japanese language learners conversation that has been collected by
the Longitudinal Survey" and a consideration of methods for its utilization.

野山広・今村圭介

Noyama Hiroshi, Imamura Keisuke

国立国語研究所

National Institute for Japanese Language and Linguistics

概要：発表者たちが所属する機関では、2007年から2011年度まで縦断的に実施・収集してきた地域日本語学習者の会話データを中核としたデータベースを構築してきた。この「日本語学習者会話データベース縦断調査編」の構築においては、ACTFL（全米外国語教育協会）の開発したOPI（Oral Proficiency Interview）テストの枠組みを活用し、外国人分散地域（A市）、集住地域（B町）の日本語学習者（各地域10名前後）の5年間に渡る会話データを収集・整備（文字化等）することで、中・長期的な日本語学習や日本語習得、そして言語生活の軌跡をたどるとともに、現場にフィードバックすることを目指してきた。本発表では、現在構築中（データ追加中）のデータベースの内容の一部とその活用方法について紹介するとともに、参加者の皆さんと意見交換ができれば幸いである。

キーワード：データベース、縦断調査、OPI、形成的フィールドワーク、Welfare Linguistics

1. はじめに

本調査・研究においては、地域における日本語学習者の言語生活に焦点を当て、形成的評価⁽¹⁾を取り入れながら、Welfare Linguistics（福利としての言語学）の観点（徳川1999）から縦断調査を行って来た。

本稿⁽²⁾では、その縦断調査の結果の一部を紹介する。具体的には、外国人散在地域に移住してきて結婚した女性（国際結婚の配偶者）に関して、これまでの形成的評価による支援結果による言語能力の変化に注目し、今後の支援の在り方について考察していく。

2. 縦断データの概要—分析対象と手法

OPIテストの枠組み（方式）を活用した日本語学習者とテストの会話を文字化して、会話能力（初級～超初級までの10段階評価）の評価情報や関連情報とともに提供している。約10人分の縦断データを中心に提供している日本語学習者に関する関連情報は「人物情報（母語、学習歴など）」「環境情報（学習環境、日本語使用・母語使用、言語使用環境、リソースなど）」「生活情報（在住期間、家族構成など）」の情報項目ごとに最低1～2項目の情報を提供していく予定である。

(1) 分析の対象

外国人分散地域については、東北地方の秋田県A市周辺に定住する、主に国際結婚の配偶者等である日本語学習者約10名の会話5年分である。

(2) 分析の手法

まず、文字化資料に見られる1) 音韻的・統語的特徴、2) 語彙や話題の特徴、3) 地域における言語生活・学習環境のもたらす方略(ストラテジー)、4) 母語話者(テスト)や非母語話者(学習

者)の会話の傾向, 5)スタイルの変化などを観察しつつ, 言語生活の実態について記述した。次に, 日本語のプロフィシエンシーの実態については, OPIの結果と, その報告の際に記述されたフィードバックシート等の内容から分析・記述した。

2. これまでの調査結果(OPIのレーティング結果等)と課題

本調査では, OPIの枠組みを活用したインタビューを行ない, 形成的な評価をすることにより, 学習者の学びをサポートすることを明らかにしてきた(嶋田, 2009)。OPIが形成的な評価に活用できる理由は, (1)明確な評価基準があること, (2)10段階で日本語力を評価できること, (3)相互のやりとりのある, 臨機応変で, 学習者中心の評価であること(OPI マニュアル:11)等が学習者の需要・要望に対応したものであったからである。しかし同時に, 5年間のOPIの実施によって, 地域に定住する国際結婚配偶者をもつ言語的課題が見え, 今後の日本語教育の在り方が見えてきた(5年目の結果については現在とりまとめ中)。

表1. 学習者の4年間のOPIレベルの結果1

学習者	母語	一年目	二年目	三年目	四年目
MB1	ロシア	初-中	初-上	中-中	中-中
MB2	タガログ	中-下	中-中	中-中	中-中
MB3	タガログ	中-上	中-上	中-上	中-上
MB4	中国	上-中	上-上	上-上	上-上
MB5	マレー	中-中	中-上	—	中-上
MB6	中国	中-中	中-上	中-上	—
MB7	中国	中-中	中-上	中-上	中-上
MB8	韓国	中-中	—	中-上	中-上
MB9	中国	上-下	上-下	上-下	上-下
MB10	中国	中-下	中-中	中-中	中-上

表1は, 縦断調査に協力して下さった配偶者の4年間のOPIのレベルの変動である。この表から①2年目には多くの学習者に判定レベルの向上が見られるが, 3年目以降は判定レベルの上では向上がほとんど見られないこと, ②1年目に中級レベルの判定だった学習者の中に, その後上級レベルに到達したものは少ないこと, が指摘できる。

もともと結婚移住女性の言語生活には, 上級の言語活動が求められる場面が極めて少ない。日常の交流や会話では, 上級レベルの会話内容に発展することは稀であると思われる。また職場に関しても, もともと上級レベルの言語能力がない場合, 上級の言語活動が必要な職に就くことはなく, 必要な日本語レベルが中級以下の職に就く場合が多くなることが推測される。OPIによる形成的な評価がそのような学習者自身の日本語レベルを自覚させ, 自立的な学びを促進することにおいて成功していることはこれまで(5年間)の関係者との交流から明らかになっている。しかし, それでも配偶者の場合, 富谷ほか(2009:132)も指摘しているように, 「日本語を使って曲がりなりにも生活が回っている状況にあって, 日本語学習に対する動機づけを維持し日本語学習を継続するのは容易なことではない」

のである。上級以上の活動が要求されない言語生活の中で、上級レベルに達するには相当な動機と学習意欲の維持が必要となってくる。これまでのフィードバックインタビュー結果からは、学習者の大半は日本語力を向上させたい気持ちがないわけではなく、日頃の生活の中で限られた時間の中で、日本語を自主的に学びつつ、日本語教室に通い続けている。

3. 分析結果のまとめ—会話データ、縦断調査からみえてきた特徴

(1) 分散地域の生活の場で展開される会話の特徴

「言い切りの形の有無（言い切らずに曖昧にすること）」「声真似での引用（直接語法、省略をする学習者が多い）」「地域方言と社会方言（特有のインプットがあり、それを活用している）」「統語的・文化的に異なる言語規範の母語話者＝テスターと非母語話者＝学習者の共同作業」「地域の言語生活・環境がもたらす話題の展開（テスターは、状況に応じて、地域の情報等を知った上で活用する必要がある）」などが挙げられる。

(2) 日本語教育・学習支援の関係者に関連して

当該地域に関する知識の重要性・必要性が改めて確認されるとともに、会話においては、「学習内容・項目（独特の言語構造・方略）」「リソース（話題の管理）」「インフォーマントの家族背景に関する情報把握」「当該地域の文化や環境に適したロールプレイカードの選択」などについて配慮することが肝要であることがわかった。その他、文字化の過程では、OPIの文字化の枠組みについては、地域の文化的背景とコミュニケーション能力（言語運用能力）の関係等を考慮して、再検討をすることがわかった。

(3) 他のデータも含めて、地域縦断調査のデータからみえてきたこと

分散地域、集住地域の両方でみられた特徴としては、以下のことが挙げられる。

1) 現場の関係者との協働の重要性

2) 形成的評価を適切にフィードバックしていくことが、その後のインタビュー結果に（最終的に）プラスに反映する。

3) 学習者（テストター）とテスターとのインターアクションについては、地域の言語生活・環境がもたらす話題に対するTの理解の重要性と、その話題も考慮した積極的かつ柔軟な対話や、ロールプレイカードの作成・選択やロールプレイの展開が肝要である。

4) スピーチレベル（敬語等）や、音声・音韻、スタイル等の適切性（評価）については、地域での住民（定住者・永住者）としての生活を考えると、今後ますます重要となることが推測される。OPIの結果を踏まえたフォローアップインタビューや言語生活調査等も十分に行ったほうが、その言語使用の実態や背景がよりわかってくる。

5) 学習者一人ひとりの住民としての声を汲み取り、地域で活かしていくための支援となるような新たな調査方法の開発や実施が期待されている。

4. 今後に向けて

本稿では、現在構築中のデータベースの内容の一部について紹介した。これまで、Welfare Linguistics（福利としての言語学）の観点から、地域に定住する外国人に対して、インタビューを縦断的に行ない、形成的なフィードバックをすることによって、日本語学習者の支援を行ってきた。その結果の初期の2年分については、文字化データを中心に日本語学習者会話データベース縦断編

(https://dbms.ninjal.ac.jp/judan_db/)として既に公開している。今後2012年度末までに、最近の3年分の文字化データと共に、彼らの言語生活情報やインタビュー後のフィードバック情報も含むデータベースとして、ネット上に公開する予定である。公開後、データベースの活用方法としては、主に以下の二点が想定される。

- (1) 従来のOPIコーパスのような、言語習得、コミュニケーション研究のために活用
⇒日本語学習者とOPIテストの会話の文字化データを、テキスト(TXT)形式及びPDFファイルで閲覧することができるとともに、学習者の日本語レベル、母語、日本滞在期間等によるデータ検索、また言語生活や評価基準などの関連情報を活用する。
- (2) 外国人の言語生活の実態を反映した、教育的資料としての活用
⇒データを素材とした研究・分析例を掲載することで、地域日本語教育の関係者や、他の研究者との共同研究の実現、充実に向けた基礎資料として活用する。

発表の場においては、調査・研究成果の紹介を行うとともに、(1)と(2)の内容を共有しつつ、聴衆の方々とデータベース活用の在り方について意見交換を行えたら幸いである。

注

- (1) ここでは、評価結果をフィードバックしつつ、生涯学習の観点からつきあい、寄り添っていくこと
- (2) 本発表の内容は、野山他(2009)、野山(2010)、野山(2012)等の内容を基盤としている。

引用・参考文献

- 嶋田和子(2009)「地域に定住する日本語学習者へのOPI活用の意義」野山他(2009)『社会言語科学会第24回大会発表論文集』所収、社会言語科学会
- 徳川宗賢(1999)「ウェルフェア・リングイスティクスの出発」(対談者 J.V. ネウストプニー)『社会言語科学』第2巻第1号 pp. 89-100, 社会言語科学会
- 富谷玲子・内海由美子・齊藤祐美(2009)「結婚移住女性の言語生活—自然習得による日本語能力の実態分析—」『多言語多文化：実践と研究』2東京外国語大学多言語・多文化教育センター
- 日本語教育学会編(1991)『日本語テストハンドブック』大修館書店
- 野山広他(2009)「地域に定住する日本語学習者の言語生活に関する縦断的研究—OPI テストを活用した会話データからみえてきたこと—24回大会(京都大学)発表論文集(ワークショップ), pp. 285-294, 社会言語科学会, 共同発表(野山・嶋田, 篠野, 塚原, 岡部)
- 野山広(2010)「縦断調査データから見える定住外国人の言語生活」人間文化研究機構大学共同利用機関法人国立国語研究所日本語教育研究・情報センター主催(3.21)「国際学術フォーラム：日本語教育における教育と研究の融合—過去と未来を繋ぐ」予稿集(「日本語教育のための実証的研究」)所収
- 野山広(2012)「日本語使用者としての対話力を育てる—地域日本語教育の実践現場から見えてくること—」鎌田修・嶋田和子編著『対話とプロフィシェンシー—コミュニケーション能力の広がりと高まりをめざして—』pp. 74-93, 凡人社
- 牧野成一監修(1999)『ACTFL—OPI 試験官養成マニュアル』ACTFL—OPI